

小学校の裏に赤目ばばあが出る。だから大抵の子は裏門を使わず、幅広の通学路に面した正門から歩いて帰る。

「赤目ばばあって何？ 目え赤いの」

「子供をさらうばあさんだよ」

「捕まったらどうなるの？」

「あの世に連れてかれるらしいぜ」

「なんで小学生さらうのよ」

「自分の子を亡くして気が狂っちゃったんだって」

「ここに通ってたの？」

「下校中車に轢かれて……」

「可哀想」

「目が真っ赤なのは犯人を恨んで流した血の涙のせいだとき、怖えー」

同じ班の子たちが怖い話で盛り上がる中、一人だけ床と睨めっこし、箒を動かすのに集中するふりをする。

「そこつ、サボるんじゃない！ 真面目にやつてる広瀬を見習え！」

痺れを切らした先生がカミナリを落とし、みんながぞろぞろ持ち場に戻ってく。

「痛っ……」

上履きを踏ん付けられた。

「じゃま。ポーツと突つ立てんなよ」

くすくす笑いを交せた陰口に俯く。上履きの白い部分にはくつきり靴跡が付き、「4-3 広瀬守」の字が汚れていた。すれ違いざま山田くんが眩く。

「親に書いてもらってんだろ？ だっせえ」

カッと顔が火照る。

「先生さようならー」

「またねー」

掃除が終わるがいなや班の子たちは解散し、速攻教室を飛び出してく。僕はわざとタイミングをずらし、のろくさランドセルを背負って階段を下りる。

赤目ばばあは怖い。けど、もつと怖いものがある。

きつかけは先月の授業参観。僕んちはお母さんが来てくれた。思えばプリントを持って帰った時から嫌な予感はしていた。案の定お母さんの存在は波紋を呼んだ。教室の後ろに並んだ保護者の中で、悪目立ちしてるのは否めない。

「あの人誰の親？ すごい厚化粧」

「浮いてるよねー」

「一人だけ違うね？ 妙に老けてるってか」

同級生の陰口や他の保護者のチラ見に構わず、お母さんはニコニコ笑っていた。うちと同じ笑顔だ。ちょうど国語の授業中で、出席番号順に作文を読む事になっていた。

「次、広瀬」

「は、はい」

上擦る声で返事をする。ぎこちなく起立したものの、緊張と恥ずかしさが相まってなかなか声が出ない。

「ぼ、僕のお母さん。四年三組広瀬守」

初っ端突つかえた。まずい。びっしり手汗をかいて原稿用紙がふやける。周りから漏れる忍び笑いがいたたまれない。ああ、早く終わってほしい。今すぐ地震が来て、教室の床が抜けちゃえばいいのに。

「頑張ってる！」

いきなり飛んできた声援に振り向けば、お母さんが口の横に手をあて、朗らかに笑っていた。

「あ……」

爆笑の渦が教室を包み、先生が苦笑いする。

「気持ちがよくわかりますが授業中は静かにお願いしますね、広瀬くんのお母さん」

「すいません、うっかり」

お母さんが照れる。だけど全然反省してない証拠に、目が合うところそり手を振ってきた。

憂鬱な回想を断ち切り、裏門を抜けてこぼす。

「……死んじゃえないのに」

いじめられるのはお母さんのせいだ。そんな妄想をしてたせいで、接近の気配を察するのが遅れた。

「誰？」

今日もまた裏門を出る。

こないだ声をかけてきたのは眼鏡のお兄さんだった。探し物を手伝ってほしくて呼び止めたらしい。あんまり必死に頼み込むから可哀想になって、十字路までの約束で付き合っただけだ。

本音を言えば、大人のひとが一緒なら赤目ばばあもおいそれと近寄って来ないだろうと踏んだのだ。

昨日はお兄さんがいたから何とかなった。今日は僕一人だ。ぎくしゃく歩いてる最中、またしても声がした。

「行っちゃだめ。戻ってきて」

周囲の空気が張り詰める。斜め後ろの電柱に真っ赤な目をしたおばあさんが隠れていた。

赤目ばばあだ！

絶対振り返らないと決め、ひらすらアスファルトを蹴る。目の前を影が塞ぎ、咄嗟にブレーキをかける。行く手にポツンとたたずむのは、黒いランドセルを背負った男の子だった。

「はあつはあつ」

おそるおそる後ろを見れば、赤目ばあはどこかに消え、夕焼けの住宅街が広がっていた。

「助かった……」

間一髪命拾いしへなへなへたりこむ。お札を言おうと向き直り、既に遠ざかっているのにぼかんとした。歩くの速い。(以下続)